大本山永平寺

晩秋

山暮れて紅葉の朱をうばひけり　（与謝蕪村）

十一月に入ると、朝夕の冷え込みが次第に厳しくなってまいります。四季折々に自然の美しさを満喫できる永平寺ですが、晩秋の紅葉もまた格別です。特に納経塔近くに植えられた紅葉の葉は真っ赤に色づき、境内の建物とうまく調和して訪れる人の目を楽しませてくれます。

落ち葉の多いこの時季は掃き作務が欠かせません。掃いても掃いても次の日には一面落ち葉の絨毯になる様子は辟易（へきえき）としてしまうこともありますが、毎日掃き続けることで綺麗な状態が保て案外気持ちのよいものです。

永平寺の生活は道元禅師のみ教えに基づいて毎日決められたことを決められた時間に行じます。繰り返すことの大切さを、掃き作務を通しても学びとることが出来ます。

この時節、七日からは冬制中が始まります。制中とは三ヵ月間の禁足修行のことで、夏と冬の年二回設けられます。夏制中は作務が多く「動」の印象を受けるのに対し、冬制中は坐禅を中心とする「静」の日々が続きます。中旬からは雪囲いも始まり廊下や建物の中に雪が入らないよう竹簀で覆っていきます。雪囲いが終わるといよいよ冬の到来です。

大本山永平寺／０７７６-６３-３１０２

大本山總持寺

御移転記念日

十一月五日は、明治四十四（一九一一）年に總持寺が能登から横浜鶴見に移転し、その遷祖式が盛大に行われた日です。

總持寺では毎年この時期に御移転記念の式典が執り行われています。その内容は、記念法要の他に、修行僧による布教弁論大会、大茶会、華道展、万灯供養、稚児行列などです。

特に三日の文化の日には、地元の方たちと協力して「つるみ夢ひろばイン總持寺」が開催され、バザール、東北・能登物産展（参道）、ステージパフォーマンス（大祖堂前）、芸術作品展示が繰り広げられ、境内は何万人もの来場者で賑わいます。今回で二回目ですが、既に鶴見を代表するイベントとして定着しつつあります。

ただ、御移転記念日というと何かお祝い一色のような雰囲気ですが、同時に大事業を成し遂げた石川素童禅師はじめ先人たちの血のにじむようなご労苦に感謝し想いを馳せることも肝要なことです。ちなみに十一月十六日は石川禅師のご命日です。

記念式典が終わると十三日からは冬安居「制中五則」に入り、様々な特別行持が行じられます。そのクライマックスが首座法戦式です。

制中五則が終わるといよいよ臘八摂心を迎える時節となり、修行僧たちの顔つきも一段と引き締まってまいります。

大本山總持寺／045-581-6021

曹洞俳壇

選・村松五灰子

草刈や唾で鎌研ぐ父想ふ

長野県　**下島　博**

評　畑や畦でかがみ込んで一途に唾をもって鎌を研ぐ父。ひたすらに働いていた父の背。齢を重ねることにより父の思いが身にしみる。「唾で鎌」でひたむきな父の像を描いた。

表札の名も薄れたり敬老日

秋田県　**小田嶌恭葉**

評　過ぎし往事は茫々と、また重ねた齢を「表札の名も薄れ」に語る。敬老日の運用が巧みで味わい深くまたリズムも自然体である。

◆警策の音のたまさか蟻地獄　島根県　藤江　尭

◆一鍬を大きくすくひ水落す　静岡県　渥美ふき子

◆風鈴に辿りつきたる昏れの風　神奈川県　小野沢邦彦

◆宵宮の胸ときめかすカーバイト　秋田県　鈴木　ゆう

◆歩荷一代自得三里の土用灸　東京都　伊奈　三郎

◆里帰りして盆棚の父母と寝る　静岡県　小泉八千代

◆隣組いつも満員涼み台　島田　イネ

◆真夏日も変はらぬままに九段坂　福島県　薄井長一郎

◆うしろより人来る気配風は秋　北海道　大野　節子

◆棚経を終えて一息足袋をぬぐ　愛媛県　能仁めぐみ

＊選者吟

鷹の得し物より羽根のこぼれけり

五灰子

＊作句小見

数年前、浜松城地内で鷹匠見学会がありました。その折の句です。十人くらいの鷹匠と鷹で訓練の様子や鷹の特性に大いに惹かれました。ところが天守閣の屋根あたりに続々とカラスが集まりだし二、三百羽くらいになり「ガアガア」と威嚇しだし、見学者もその異様な雰囲気に緊張感が漂いました。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

棚経の僧を送りて外に立てばねむの若木に花ひとつ見ゆ　北海道　佐賀　ユリ

評　盂蘭盆会の仏事を終えてほっとした作者の表情が見えてくるようだ。準備に慌ただしいときは、目に入らなかった淡い合歓の花。「棚経、僧、ねむの若木」など、ことばの運びも自然でしっとりとしている。

「よめるまで・ちかづくな」って書いてあるHIRO トラックの後ろを走る　山口県　横川美代子

評　車間距離を保つよう注意を促すステッカーが車体後部に付いていたのだろう。読めたということはかなり近づいたのだ。口語表現を生かして勢いがある。現代の一風景。

◆さざ波もなき運河の橋を渡り行く車の彩（いろ）に水面（みなも）さゆらぎ　広島県　山田美智子

◆子供らの縄跳びの輪を抜け出でて紋白蝶は青空に消ゆ　福島県　大槻　弘

◆紅萩の枝垂るるところ風走り秋の気配のさ庭辺に濃し　東京都　長谷川　瞳

◆施食会を終へて帰れる草の径黒き揚羽がわれにまつはる　広島県　徳永進一郎

◆施食会の経読む声が響くなり暑さを少し和らげながら　兵庫県　河本佐知代

◆力瘤を見せに来たのか目の前に入道雲がすがたあらわす　福岡県　三吉　誠

◆また家に戻れますよう衰えし母に食べさす干し柿ひとつ　山口県　濱田　道子

◆雨承けの瓶も猛暑で孑子（ボウフラ）の影絶えて雨水張るを待ちわぶ　愛知県　小久保左門

◆ミンミンの初音を聞けばよみがえる提灯お盆ああ終戦の日　長野県　太田　舛次

◆雨の中テントを張りて商へる朝の市より胡瓜買ひきぬ　岩手県　阿部　凞子

＊選者詠

取れ立ての胡瓜の棘は刺さらねど昨日の文のトゲの痛しも　ちづ

＊作歌小見

炎暑の夏、そしてゲリラ豪雨、いかがお過ごしでしたか。被災地の皆さまには心から御見舞い申し上げます。

山田さんの一首の、運河に映る車体の色のゆらぎに炎天下の夏のきびしさを思いました。